金銭を浪費する知的障がいのある方の支援

あしたか太陽の丘 ○後藤竜弥 鈴木孝伸

要旨

演者は、障害者支援施設で自立訓練（生活訓練）・就労継続支援B型を提供しながら、自立訓練では知的障がいのある方々が地域で自立した生活できるようになるよう、また、就労継続支援B型では施設で落ち着いて生活できるように支援している。演者は今年度、就労継続支援B型に所属して、50歳の療育手帳と、精神保健福祉手帳を持っている利用者を担当することとなった。本人の特性を踏まえて実践した関り方や支援方法を報告する。
(※論文掲載については、本人の了解を得ている)

1 目的

精神病院から退院した本利用者と信頼関係を形成しながら、安定した生活を送るために本人が理解しやすい支援を提供する。金銭の浪費や不適応行動を減少させる方法を模索していく。

2 方法

今年の2月から4月までの2か月間精神科病院へ入院をしていた。入院の経緯は

①金銭の浪費、遠隔地への外出や外泊

頻繁に金銭の要求がある。要求はエスカレーターしやすく、入院前には1度の旅行に10万円を持ち出すようになっていた。

②金銭と抗精神薬の過剰な要求と満たされない時の抑えきれない興奮と暴力及び破壊行為

金銭や頓服薬等の要求は通るまで繰り返し、最終的には暴言、威嚇、暴力、破壊等の行為により、要求を受け入れざるを得なくなっていた。

③巧みな交渉

担当職員が不在の時に当直職員や上席職員にあたかも担当職員が承知しているかのように話をして、一旦承認を取ると後には絶対に引き下りなかった。新入職員に対しては威嚇や恫喝、暴力行為をとるようになった。

④同僚利用者との軋轢による不穏の増悪

自分の思いを主張し、他人に配慮する事が得意でないため些細なことで他の利用者といさかいを起こす。自分の思い込みをあたかも事実のように気を許している職員に訴えることがある。

以上の点が頻発したため、本人の状態が落ち着くように精神科病院に入院して治療を行った。

演者は4月から担当職員として対応をしていく中で、今回入院先の医師からの助言、上司や元担当支援員から本人の情報提供を受けた。

①安定した生活を保つため、生活上のアウトライン決め、具体的な約束事とする。

②利用者や職員からの情報で不安を抱き易いた

め、情報の窓口を担当職員に一本化する。

③使用できる障害基礎年金の金額を提示し、月々の使用できる金銭を明確化する。

これらの助言を受け、支援方法を検討した結果、①本人と約束事を決めてノートに書く。②随時の変更はしない。③定期的に約束の実施状況の確認を担当職員と行う。④他の職員との交渉に関しては承認しない。⑤同僚の利用者との生活上の関わりの中で、不満や不平を抱き易いことから、本人から話しを聞く等対応が必要となる。以上5点を実施して、本人の生活を観察した。

3 結果

①旅行を申し出は、現在まで見られない。代わりに1か月に1度、外出を行っている。

②本人と「個別面談」を行い、金銭の使い方等をノートにまとめ、それを目標としている。

4 考察

本人とかかわる中で、1度決定した事柄を何度も確認したり、変更を要望することがあった。演者は本人が不安に陥りやすい性格であることを感じた。併せて目標にする事柄への期間が長期間であると、確認行為や変更により本人が振り回されて不穏に陥っていく傾向がみられた。

5 まとめ

演者が本人の特性理解が不足している中、関係者からアドバイスを受け、ポイントを絞って支援計画を組み立てた。併せて、本人の性格や特性を周囲が理解して関わることで落ち着いた生活を送り、不穏状態に陥った時にも気持ちの切り替えが早くなり、大きな不穏行動に発展することがなくなった。本人が安定した生活を送るため、支援者が同じような関りをして、金銭の使い方を計画できる方法を模索していく必要がある。一過性ではなく、汎用性がある支援に発展していく今後の支援を検討する必要性を感じた。